

新しいチーム制と効率化

プリオン病研究センター長



毛利 資郎

MOHRI, Shirou

独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所の一員に加えていただいて半年になろうとしている。前職でも経験した非公務員化移行の混乱を不幸にもまた経験している。ご承知のように国家公務員の非公務員化は人件費削減のための合理化方策の一つである。非公務員となった私どもは全ての面で厳しい業務環境を強いられることを覚悟しなければならない。個人の自由や既得権より法人の利益が優先する事態に直面することも多くなるであろう。チーム制とか業務の効率化もその一つである。動物衛生研究所のこれまでの運営システムや検討の経緯を知らないの、的外れの戯れ言との誹りを覚悟の上で雑感を述べたい。

新しい年度に入ると、早速、動物衛生研究所にも業務効率化対策推進チームなるものが設立された。これは機構の「業務効率化推進計画」などに基づくものである。この中ではもっぱら業務の経済的効率化について話し合いがもたれている。しかし、実効上問題があったり、不可能であったりしてまだ画期的効率化対策には到達していない。やはり、こまめに省力方策を実行する以外にないのかも知れない。削ることのみを考えていると気持ちも含めてマイナススパイラルに入る可能性もあるので、収入を増やすことも大いに考えるべきである。例えば、外部資金を導入すること、研究費のオーバーヘッドコスト（一般管理費）や外部の利用者からベンチフィー（施設利用料金）を徴収することが考えられる。一般管理費に関してはすでに徴収することが決められている。当研究所にはもともと力のある研究者が多いので外部資金の確保に関してはそれほど問題はないと思われる。ただし、研究環境や施設設備にも恵まれ、それほどあくせくしなくても研究資金が適当に享受できていたこれまでのシステムに安住しなければという条件付ではあるが。

ところで業務効率化対策の重要な柱として、研究

者にとって主たる業務である研究の効率化についても具体的方策が打ち出されている。今年4月からスタートした旧研究室を再編した新しいチーム制である。研究者が、小さな研究組織単位で、協力や切磋琢磨もなく、議論を戦わすことも少なくバラバラの方向を向いて研究を進めていくことが非効率的であることは明白である。個人で行える内容、規模の研究が少なくなっていることから考えても新しいチーム制は一つの方向性を示す試みである。研究者はこのシステムを積極的に活用すれば研究の効率化に結びつけることが可能ではないだろうか。動物衛生研究所ではチームをまたがったユニットという組織があり、複雑な人員配置となり、必ずしも効率的ではないという声も聞こえる。しかし、それは些細なことであり、チーム間の協力と同じで、研究者同士がコミュニケーションを図り、信頼関係を築くことで克服はできないだろうか。いままで、小さい単位でこなしていた事務書類や運営に関わる仕事を研究管理監や新チーム長に委ねることで、雑事から解放され、研究のアイデアを考えるゆとりが出来たとポジティブに考えるべきであろう。今後、研究資金は自分で汗をかいて取ってこいという傾向が強くなることは必至である。

国のシステムを変えることが出来るかどうか、それに費やすエネルギーと得られる結果を天秤にかけたときのバランスを考える必要がある。問題点を指摘することは重要なことであるが、それがたやすく変えられる内容のものであるかどうかを考えるべきである。すぐに変えられないのであれば少しずつ変えようという問題意識を常に持ちながらその中で如何にしたら自分の仕事を最優先させることができるか、社会に貢献できるか、そして楽しく仕事をすることが出来るかを考える方がより効率的ではないだろうか。